

フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展 関連プログラム

音楽を奏でる写真たち
木之下 晃「世界の音楽家」

インタビューシリーズ 第3弾

「写真家・木之下晃の人と作品を語る」

ゲスト：木之下 貴子 氏
(株式会社 木之下晃アーカイヴス)



アルフレッド・ブレンデル 1974年7月2日 東京文化会館
©Kinoshita Akira Archives

FUJIFILM SQUARE

目次

写真家・木之下晃の素顔	___ p.3
妻・登茂枝さんとの二人三脚	___ p.4
家族が選ぶ、木之下晃のこの一枚	___ p.6
木之下晃と日本のマエストロたち	___ p.8
プリントの美しい黒「キノシタブラック」	___ p.12
傑作中の傑作「アルフレッド・ブレンデル」	___ p.13

本プログラムについて

フジフィルム スクエアは、価値の高い写真作品を銀写真プリントで展示し、ご来館者に写真作品との出会いの場をご提供しています。また、作品への理解をさらに深めていただくために、ギャラリートークや講演会等の鑑賞サポート活動に力を入れており、2019年度には1万4千人以上の方々にご参加いただきました。

現在は新型コロナウイルスの影響で、写真展会場で行う鑑賞サポート活動は見合わせておりますが、新たな関連プログラムとして、特別ゲストへのインタビュー記事を公式ウェブサイトにて公開してまいります。

ご来館いただき写真展をご鑑賞いただいた方にも、ご来館されていない方にも写真の魅力を知っていただき、作品制作の背景や意図等への理解を深め、お楽しみいただける機会となれば幸いです。また、本インタビュー記事が写真文化の価値を将来に伝えていくための有益な資料となることを願っています。



ゲストの木之下貴子氏（株式会社 木之下晃アーカイヴス）

写真家・木之下晃の素顔

—— コロナ禍のため、開催を見合わせているギャラリートークに代えまして、今回もインタビューシリーズとしてお送りいたします。本日は写真家・木之下晃氏の次女で、木之下晃アーカイヴスの取締役を務めていらっしゃる木之下貴子さんにお越しいただきました。本日はよろしくお願いいたします。

木之下 よろしくお願ひいたします。

—— 今日木之下先生の素顔やご家族の皆さんの思いなど、いろいろとお伺いできればと思います。まずはお仕事の話の前に、ご家庭ではどんな方だったのでしょうか？

木之下 ひと言で言えば、世のお父様方がそうであるように、娘に甘い父親だったかなと思います。両親と姉と私の四大家族でした。もちろん怒られること、喧嘩をすることは当然ありましたけど、そんなに声を荒げることがなかったかな。一緒に仕事をするようになり、電話でやりあっている様子を見て、こんなに厳しい一面があるんだっていうのを初めて知ったというくらいでした。私たちに対しては怖いとか、そういう感じは一切なかったですね。

—— 木之下先生は物腰の柔らかい、とても優しい印象の方でしたので、ご家庭でも優しいところはそのままでしたのですね。ご家庭ではお仕事の話がされることもありましたが？

木之下 するもしないも、まず父が独立した時は仕事場も持たず、狭い家の中ですべてをこなしていました。私たちがお風呂に入った後、脱衣所に暗室を作って、そこでプリントの制作をしていました。あと、父は単

に写真を撮ることだけではなくて、インタビューをしたりとか、写真に原稿を添えたりだとか、そういったことにも力を入れていましたので、こたつで原稿を書いたりもしていましたね。なので、もう分けようがない。スタート地点がそんな感じでした。父が写真に関わる姿っていうのは常に見ていたように思います。

—— そういった環境で貴子さんが木之下先生から感じたこと、学んだことはありますか？

木之下 ひとつのことに生涯をかけていた姿は、やっぱりすごいなって思います。父は、撮影第一でしたけれども、家庭が好きな人でした。本人は高校生の時に父親を亡くして、下にまだたくさん兄弟がいたにもかかわらずバラバラになってしまったことがあり、すごく苦労した経験があるんですね。そういったことが、やはり家族に対する思いとして反映されていたところはあったかもしれません。音楽会があればとにかく出掛けて、当初は家庭内で集中して作品作りをする、ということを繰り返していました。今回展示している作品も、そういう中から生まれたものです。

妻・登茂枝さんとの二人三脚

—— 木之下先生のお仕事を最も理解され、名助手、名マネージャーとして支えて来られたのが奥様の登茂枝さんだと思います。お二人のご様子をご覧になっていて、貴子さんはいかがでしたか。

木之下 父が心筋梗塞で倒れたことが、母がその後、父をサポートするきっかけになっていきました。1986年の1月に突然体調が悪くなり、撮影していた劇場で立ってられなくなって、舞台袖の床に寝転ぶような状況になってしまったらしいんですね。翌日、病院に行ったら心筋梗塞を起こしているということが



展示風景



『世界の音楽家』全3巻（絶版しているため、現在は入手困難）

わかりました。翌2月にバイパス手術を受けるのですが、そんな状況でなんと、芸術選奨文部大臣賞が授与されるという内示をいただきました。まさに手術を受けた2月26日に受賞者の発表がありました。お祝いもたくさん届いて、写真界から受賞者が出るというのも当時はとても珍しく、取材もあって、母はてんやわんやだったと思います。手術は無事成功して幸いでした。

—— 木之下先生はまだお若くて、49歳の時でしたよね。突然の大手術でそれどころではなかったと思いますが、大きな賞は木之下先生にとってもかけがえのない喜びだったでしょうね。

木之下 この受賞は『世界の音楽家』（小学館）という3冊組の写真集が評価されてのものだったんですね。大変立派な写真集を刊行していただきました。そこには「フリーで音楽の写真を撮ることは、大変孤独で辛い作業だった」というふうに書いてあるんです。でも、その辛い作業が写真集という形になり、それが評価されて大きな賞をいただいたことで、おそらくその後、本人も仕事がしやすくなったでしょうし、もっとこんなものを撮りたいという欲求も出てきたと思います。

—— 音楽写真の金字塔ともいえる作品集ですよ。手術後の撮影は大変だったのではないのでしょうか。

木之下 そこからは、父は重いものを持ってはいけなと言われて、母が運転手となり、ずっと父に同行するという生活が始まっていきました。母はマネージャーとは名乗らず、運転手、荷物持ちとっていましたが、いろいろ大変なこともあったと思います。普段のサポートはもちろんですが、フリーに転身するときなど、大きな決断の場で父を支えていたのが、母でした。



カルロ・マリア・ジュリーニ
1975年10月3日 東京文化会館
©Kinoshita Akira Archives



マリア・カラス
1974年10月27日 東京文化会館
©Kinoshita Akira Archives

家族が選ぶ、木之下晃のこの一枚

—— さて、今回の展示では1970年代から2000年代までの作品を網羅して展示しています。貴子さん、それから登茂枝さん、長女の聖子さん、皆さんそれぞれのお気に入りの作品、印象深い作品をご紹介いただこうと思います。

木之下 まずは母のお気に入り、カルロ・マリア・ジュリーニの写真です。ジュリーニに関しては、評論家の方々も「神とコンタクトをするような指揮者だ」というようなことをおっしゃっていますが、父も撮影していて、ホールが教会のようになったような瞬間があったと言っていました。音楽会の会場というのは客席で音を出すことはできない。そんな中で写真を撮ろうとすると、どうしてもフォルテシモで盛り上がったところになりがちです。当然、被写体もそういう瞬間の方が絵にもなりますし、写真を撮ろうと思うとどうしてもそういう場面が多くなる。そういった中で、動と静の「静」を感じるこの写真が撮れたというのは、やはりすごいことなのではないかと母は言っています。この静寂を感じられる写真が、母の大好きな一枚です。

—— 今回の展示でも、ジュリーニの写真の静寂、神聖な空間がひとときわ光っていますね。次に、長女の聖子さんが選ばれたのはどの作品でしょうか。

木之下 姉はマリア・カラスの写真を選びました。これはカラスが最後に来日した時の写真です。この時は東京公演が2回あったんですね、NHKホールと東京文化会館と。父はフリーになったばかりだったので、縁あってオフィシャルカメラマンを務めることができました。両日とも撮影をしているのですが、これは2日目の東京文化会館での公演の写真です。この時は、シャッターを切った写真すべてが素晴らしいと言っていました。今回の展示では壁面に「神のようなものが、シャッターを押してくれる瞬間がある」と添えて

いただいておりますが、この撮影の時「初めて何者かにシャッターを押させてもらったような気がした」と父が話していて、これは、その時の父の言葉です。

——フリーになってまだ間もない頃だったということも考えると、木之下先生にとっては運命的な出会いのひとつだったかもしれないですね。貴子さんはどの作品を選ばれましたか。

木之下 私はこのカラヤンの写真を選びました。指先から何か発してるんじゃないかという場面一枚です。キャプションにも、カラヤンから専属カメラマンをやらないかと父が誘われたというエピソードを書いておりますが、このお誘いは、この上なく栄誉なことだったと思うんです。けれど、お断りしたのは、カラヤンの専属になってしまうと他の写真は撮れなくなってしまう。あともう一つ考えられる理由としては、ドイツ語ができなかったこと。もし父がドイツ語を自由に操って、カラヤンと打ち解けて、その上で誘われたら話が違ってたんじゃないか、そんな気もしています……。

——それでも、その後もプライベートの場面など、たくさん撮影されていますよね。

木之下 はい。そんなこんなでお断りはしたんですけども、さすが「帝王」で、その後も撮影の機会はたくさんいただきました。カラヤンは、世界中で選ばれた人にしか撮ることを許さなかった場面というのが多くあります。プライベートな空間での撮影もその一つ。そこでのカラヤンは表情は柔らかいけれど、やっぱり威厳があります。家庭でもカラヤンであることを崩していなかった生き方っていうのはすごいと思いました。そのカラヤンをきちんと写真に写し込んだ父の仕事もすごいと思います。

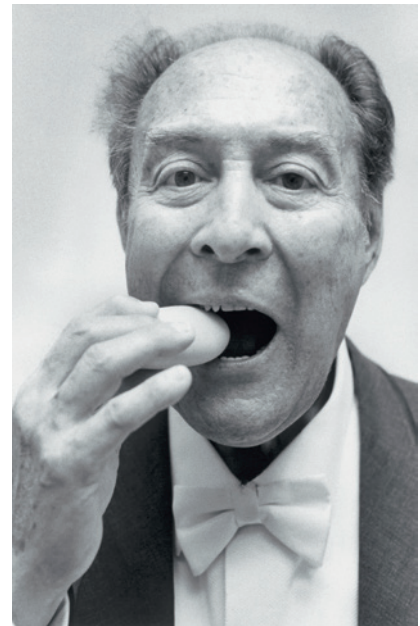
——まさに写真を介したコミュニケーションだったのかもしれないですね。今回の展示作品には含まれてい



ヘルベルト・フォン・カラヤン (1908-1989)
1988年4月30日 ザ・シンフォニーホール (大阪)



写真集『石を聞く肖像』（飛鳥新社、2009年）と石の実物



ジャン＝ピエール・ランバル
「腹が減った」と言いながら石を食べる
ユーモアを見せてくれた
©Kinoshita Akira Archives

ませんが、〈石を聞く肖像〉というポートレートのシリーズも、写真でのコミュニケーションから生まれた作品ですよね。

木之下 木之下はライフワークとしてポートレートの撮影にも精力的に取り組んでいました。父は撮影に行った後、撮りっぱなしにせず、写真をきちんと焼いてご本人にお見せして、その写真を気に入ってくれたらまた次もと、撮影後や演奏後にそうした機会を作っていました。音楽家の方たちとの交友をととても大切に、認めてもらうこと、彼らに写真を気に入ってもらうことをすごく重視していたんですね。このようにして写真を介して親交が生まれ、〈石を聞く肖像〉というシリーズも生まれました。〈石を聞く肖像〉は、被写体にタマゴ形をした石を手渡し、その瞬間を撮影した、木之下のポートレートシリーズです。被写体となった方達の素顔を垣間見ることができます。フルティストのジャン＝ピエール・ランバルは、今回の展示キャプションにもありますが、演奏後に〈石を聞く肖像〉の撮影に快く応じてくださって「腹が減った」と言いながら石を食べるユーモアを見せてくれたんです。実は、ランバルはこの一年後に亡くなって、演奏後は非常にお疲れになっていたそうなのですが……。それでも、よく知っていた仲でしたので、演奏後にもう一枚撮らせてほしいという要望にも快く応えてくださったのでしょう。

木之下晃と日本のマエストロたち

——では、今回展示している作品から日本のマエストロたちの写真をご紹介しますと思います。

木之下 まずは小澤征爾さん。日本を代表するマエストロです。小澤さんは父より一つ年上で、年齢が近かったこともあって、若い頃の小澤さんを特に精力的に撮影していました。30代、40代の頃は400回くらい撮

影をしているんですね。今回展示している作品は、切手の原画にもなった写真です。父は小澤さんからすごくいろんなことを学んだと言っています。集中力がすごい方で、リハーサル中は指揮台の真下に座らせてくれて、そこからの撮影まで許してくれたんです。

—— いくら集中力がすごいといっても、なかなかさせてもらえることではありませんよね。小澤氏の懐の深さ、お二人の関係の強さも感じます。

木之下 そういうことを続けていくうちに、指揮者をこう撮ればいいんだと、タイミングなんかもわかるようになってきたそうです。指揮者やコンサートマスターは、音を出すタイミングより、一瞬早く合図を出します。そしてオーケストラがついてくる。ということは、音楽を聴きながら撮影をしたら、もう遅いということになってしまいますよね。そういうことも小澤さんとの撮影から学んだと言っていました。私、最近マイブームとなっていることがあります。昔の音楽会を記録した映像は今、インターネットの動画でも見ることができますよね。それを見ながらここだ！というところで映像を止めてみるんです。まあ、変なところで止まります（笑）

—— なるほど（笑）。シャッターチャンスの難しさを実感できるわけですね。確かに難しそうです。

木之下 ぜひやってみてください。一番いいところで止めたつもりがまったくだめだったりします。木之下はシャッターチャンスの反応がよかったと自ら言っていました。本当によかったんだと実感しています。もちろんネットの通信速度の関係なんかもあると思いますけど、物理的なタイムラグというのはカメラでもあると思いますので。小澤さんから学んだシャッターチャンスというのは、音楽を聴けばできるというものではないし、指揮姿を見ればできるというものでもない。なかなかすぐに習得できるものではないと思います。



小澤征爾 1974年12月25日 NHKホール
©Kinoshita Akira Archives

—— 木之下先生の優れた反射神経、もともとの素質というのも大きかったかもしれませんね。そして、もうお一方は、朝比奈隆氏ですね。

木之下 今回は木之下が自ら焼いた、六切のヴィンテージプリントで展示しています。93歳で亡くなる最期まで現役で指揮棒を振られていた、日本を代表する素晴らしい指揮者です。気品だけではなくて、包容力といったものまでこの写真には写り込んでいるように感じます。朝比奈さんに対しては、父も特別な思いを持っていたんですね。自宅に招いて手料理を振る舞ってくださったこともありました。また、木之下が1974年に撮った写真をととても気に入ってくださって、朝比奈さんがお亡くなりになった後に、大阪フィルハーモニー交響楽団の音楽監督室の机の引き出しからその写真が見つかったという出来事がありました。朝比奈さんはあらゆる人に対して愛情をお持ちの素晴らしい人格者だったと思いますが、木之下も「写真を大切にしてくださっていたことがわかった時には涙が溢れた」と話していました。

—— いいお話ですね。

木之下 朝比奈さんは「長生きこそ最高の芸術だ」とおっしゃっていました。とにかく生涯現役を貫かれた、その姿にも父は感銘を受けたんですね。父は長野県の諏訪の出身なのですが、朝比奈さんの言葉に触発されて「寿齢讃歌」というお年寄りにカメラを向けることでお年寄りに輝いてもらおうというプロジェクトを茅野市美術館で始めました。それが今、愛知県東海市にも広がっています。

—— 小澤氏や朝比奈氏をはじめ、木之下先生が音楽写真という分野を切り拓いていく中で、木之下先生を育てるといいますか、音楽写真を一緒に育てていくようなことをしてくださった音楽家の方が、何人もいらしたんですね。



(作品右上) 朝比奈隆 1998年6月4日 サントリーホール

木之下 そうですね。父のようなスタンスで音楽を撮っている人がそれ以前にいなかったというのも、すごくラッキーなことでした。本当にマエストロたちにも育てられたと思います。ちょうど日本はバブル景気に差しかかる中で、世界中からマエストロやオーケストラが日本に来ましたので、そこを撮影する機会にも恵まれました。さらに「撮影窓」ができるという幸運にも恵まれます。父はシャッター音を気にせず撮影できる場所を作ってもらえないかと考えていた中、新設するホールからも設計の段階で助言を求められ、撮影用の窓を作ってほしいとお願いしました。そして、最初に Bunkamura オーチャードホールに撮影窓ができたんです。

—— これは横浜みなとみらいホールの舞台裏にある撮影窓だそうですが、こういったところもあるんですね。

木之下 撮影窓から撮影することで、マエストロたちも今までに撮られたことのない角度からの自分の姿を見ることができ、大変喜んでくださいました。主催者側にとっても、いい記録写真になりますので、この撮影窓というのは、その後スタンダードになっていったんですね。ですが、その撮影窓というのはとても小さいので、そこにカメラを立ててしまうと、例えば指揮者を撮りたいのに前に楽器がかかってしまう、なんていう問題も出てくるんです。そうすると、木之下の写真を認めてくれているステージマネージャーさんがちょっとだけ、音楽に影響のない範囲で楽器の位置を動かして道を作ってくださいとか、そういう対応までしてくださっていたようです。本当に多くの方に支えられて、こういう写真が生まれていたんだと、ありがたいと思います。

—— 同じく日本人指揮者の佐渡裕氏とは、デビュー前からの付き合いだったそうですね。



横浜みなとみらいホールの撮影窓 写真提供：木之下晃アーカイヴス



佐渡裕氏の写真について話をする木之下貴子氏（作品左上が佐渡氏の写真）

木之下 そうですね。今回展示しているのは、佐渡さんがお若い時の写真です。佐渡さんとはデビュー前からの知り合いということで、彼も父のことを本当に慕ってくださっていました。今はオーストリア・ウィーンのオーケストラの音楽監督も務めて、国内外でご活躍です。そういう輝かしい実績を積んでいく状況すべてを写すことができたというのが、父にとって大きな喜びだったんじゃないでしょうか。来日する巨匠を撮るのとはまた違った思い入れがあったように思います。被写体が輝くことで写真も輝く、というのは当然のことですけれども、父はよくそう言っていました。佐渡さんは、写真を輝かせてくださっているお一人です。木之下が倒れる数日前に、最後に撮影したのも、佐渡さんでした。特別なご縁を感じます。

プリントの美しい黒「キノシタブラック」

—— さて、今回の展示の前半部分では、初公開のヴィンテージプリントを展示させていただいています。プリントの際立つ黒の美しさに息を呑みました。木之下先生は撮影と同じくらい暗室作業もお好きだったそうですね。

木之下 『音楽現代』（芸術現代社）というクラシック音楽の専門誌の口絵を40年以上にわたって担当していたのですが、長きにわたって、プリントを写真原稿として入稿していました。入稿用のプリントを焼いている時、自分のためのものも作ろうと思ったようでたくさんの作品が残されています。その中で特に気に入ったものにはサインが入っています。こうしてご覧いただくのは初めてで、とても嬉しいです。父の写真は、やっぱりこの黒ですね。この黒を出すために試行錯誤して、自分で現像液を調合し、うなぎのタレのように継ぎ足し継ぎ足しして「この現像液じゃないとこの黒は出ないんだ」と大事にしていました。プリント作業が大好きで、楽しんでいましたね。海外のマエストロたちは、この黒を「オリエンタルブラック」とか「キノシ

タブラック」と言って、認めてくださっていたそうです。このゼラチン・シルバー・プリントを、この空間で、この照明で、見ていただくことで、初めて伝わるものもあるのかなと思います。

傑作中の傑作「アルフレッド・ブレンデル」

——そして、木之下作品の中でも傑作中の傑作、木之下晃のこれぞ一枚というのが、今回の告知物でも大きく使わせていただいているアルフレッド・ブレンデルの写真ですね。フジフィルム・フォトコレクションにも収蔵されている作品です。

木之下 富士フィルムさんの永久コレクションに選んでいただいて、父はとても喜んでいました。実は、父はカラヤンにしようかなって思っていたみたいなんです。日本での知名度を考えると、やはりカラヤンの方が多くの方に知られているので。父の中では、ブレンデルの写真は代表作としてこれまであらゆるところに出していたから、カラヤンにしようかという思いもあったみたいなんですけど、「代表作は一枚でいい」という母のアドバイスがありまして……。やっぱり写真に力があるなと、改めて実感します。音楽とか写真とか、特に興味がない方たちもこの写真をすごく楽しんでくださって、この写真のすごさというのを今回改めて感じます。

——一枚の写真の力というものを体現するような名作ですよね。ポイントは眼鏡に鍵盤が映り込んでいるところです。

木之下 眼鏡に鍵盤が映り込んでいるっていうのは、偶然といえば偶然かもしれないですけど、私は、ブレ



フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 閉館後の無観客会場でのインタビュー風景
ゲストの木之下貴子氏（左）と聞き手の大澤友貴氏（右）



アルフレッド・ブレンデル 1974年7月2日 東京文化会館
©Kinoshita Akira Archives

ンデルがピアノとの戯れを無上に喜んでいるかのように、見れば見るほどそう思うんですね。この写真は、ブレンデルの二度目の来日の時のものです。一度目も、もちろん撮影に伺っていて、その後、写真をお見せして「いい写真だね」と言っていたら、二度目ということもあって、精神的にも物理的にも、一歩踏み込めたからこそ撮れた写真だと思います。ちょっとコミカルにも見える写真なので、父はブレンデルにこの写真を見せる時、彼がどんな反応をするかと、ドキドキしたんだそうです。そしたら、彼はものすごく面白い写真だ、いい写真だって喜んでくれたということでした。

—— 名作がずらりと並んでいますが、改めて貴子さんから、今回の写真展ではどんなところに注目してもらいたいですか？

木之下 今回大きく3つのパートに分かれていて、初公開のヴィンテージプリントと、今回新たに制作したプリント、そしてマエストロたちの直筆メッセージが入っているプリントがあります。それぞれに楽しんでいただきたいですね。直筆メッセージでは、マエストロが木之下へ「写真のマエストロ」と書いてくださったりしていて、嬉しかったらうなと思います。マエストロたちの書いたメッセージも、じっくり見ていただきたいです。それから今、デジタルで写真を撮っている、若い方たち、子供たちにもぜひ見てもらいたいですね。やっぱりフィルムで撮った「一写入魂」の写真は、何か伝わるものがあるんじゃないかと思います。父は、写真はシューティングだと言っていました。連写したのではいい写真は撮れないと、最後まで連写は絶対しないで一枚をシューティングすることに精魂を込めていました。そういった信念から生まれた写真とこのを見てもらいたいですね。

—— 最後に、木之下晃アーカイブスの今後の活動についても教えていただけますか。



マエストロたちからの直筆メッセージ入り作品の展示

木之下 フィルムの状態でたくさんの写真があって日々、圧倒されていますが、父が撮ってきた写真は貴重な記録でもあると思うので、大事にしていきたいなと思っています。あともう一つ、娘として思うのは、最初にも少しお話ししましたが、木之下は高校の時に自分の父親が亡くなって、大学の進学が叶わなくて絶望したりとか、若い頃、悶々としていた時期がありました。そんな中でも自ら道を切り拓いて、こういう写真を撮って、亡くなった後にも、こんな立派な場所で写真を展示してもらえるようになって。世の中には苦労や努力の上に何かを成し遂げた方が沢山いらっしゃると思いますが、絶望を乗り越えて写真家になったという父の生き様についても伝えていけたらいいなと思っています。

—— 作品の素晴らしさはもちろんのこと、木之下先生の生き方に感銘を受ける方もたくさんいらっしゃると思います。本展を機に、木之下先生のいろいろな作品も知っていただけると嬉しいです。このたびは貴重なお話をありがとうございました。

木之下 こちらこそ、貴重な機会をいただきまして本当にありがとうございました。

聞き手：大澤友貴（フォトクラシック）

● ゲストプロフィール

木之下 貴子（きのした・たかこ）

写真家・木之下晃氏の次女。株式会社 木之下晃アーカイヴス取締役。2010年に父・木之下晃が設立した「木之下晃アーカイヴス」で、3万本を超える膨大なフィルムの管理・保存、作品を後世に残すべくさまざまな業務を手掛けている。

フジフィルム スクエア 写真歴史博物館 企画写真展
関連プログラム

音楽を奏でる写真たち 木之下 晃「世界の音楽家」

インタビューシリーズ・第3弾

「写真家・木之下晃の人と作品を語る」

ゲスト：木之下 貴子 氏（株式会社 木之下晃アーカイヴス）

展覧会

会場：フジフィルム スクエア 写真歴史博物館

会期：2020年10月1日（木）－12月28日（月）

主催：富士フィルム株式会社

特別協力・監修：株式会社 木之下晃アーカイヴス

後援：港区教育委員会

企画：フォトクラシック

記事

公開日：2020年11月5日

発行：富士フィルム株式会社 コーポレートコミュニケーション部 宣伝部

編集：フォトクラシック

デザイン：脇野直人

© 富士フィルム株式会社 禁無断転載